園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年11月

発達を理解し、応答する～中庸～

●保護者様から送信いただく連絡ノートは、私も毎日目を通させていただいています。お忙しい朝の時間ですので、ご家庭での様子を逐一書いていただく必要はございません。ただ、時折垣間見える可愛らしいエピソード、週末にお出かけした場所やお家での出来事には、毎度のことながらほっこりさせていただいています。

スプーン事件

●今回、Aさん（仮名）の保護者様にお願いをし、ある日のAさんとご家族とのやり取りについての連絡ノートの記載を公開することをご承諾いただきました。というのも、その内容がどこのご家庭でも直面しうるようなお話であり、保護者の皆さんにとっても共感いただける大変有益なケーススタディになると思ったからです。早速その内容を引用します（お名前以外は原文のままです）。

　いつも面白いおたよりをありがとうございます。お隣の高齢者施設に「虫とって下さ～い！ありがとうございまーす！」と虫取り網を嬉々と差し出し挨拶する様子に、クスクスと笑わせて頂きました。

　それから橋本先生のコラムの工藤先生の本にはハッとさせられました。私も古典が好きで（中略）しかしこの『仁（人を思いやる心）』というのは、簡単なようで本当に難しい。今一度、我がふり直そうと思った次第です。

（ここからただの愚痴です）

　A の子育てには、なかなか手を焼いています。昨日の朝は『スプーン事件』。朝ごはん中に A が「ママ、目玉焼き半分あげるよ、取りに来て」と、キッチンに立つ私を呼びました。「はいはーい」と私は返事をしながら、受け取るためのお皿と箸、ついでに妹の離乳食のスプーン、パパのヨーグルト用のスプーンを持ってダイニングテーブルで待つ A のところへ。しかし目の前でポトっと目玉焼きを落としてしまった A。悲しそうな A が「もう！ママ来るのが遅いからだよ！ついでに色々持ってくるからだよ！」と大怒り。そしてカッとなった様子で、私が持ってきたスプーンを握り、わざわざキッチンに戻しに行く A。「もう！ママやり直ししてよ！！」と無茶ぶり。私は『ただでさえ忙しい朝に何なんだ』というイライラの気持ちで、「いい加減にしなさい！人のせいにしない。そんなことで怒らない。いつも言ってるでしょう？」と怒り、パパに相手を変わってもらい、なんとか朝を乗りきりました。

　孔子やその弟子たちなら、こういう時にどうするだろうかと、未だに考えています…。

●健気（けなげ）で愛くるしい A さんの成長の姿はもとより、お母さまご自身の内心の葛藤を論語に絡め、「こういう時孔子はどう対処していたのだろうか」という所にまで思考が及ぶところが実にユニークで素晴らしいと私は感服しました。と同時に、こうした問題への答えとなるような記述が論語などの中にあったかどうかが気になりだした私は、過去に読んだ書籍を読み返してみました。すると「中庸」の中にそれらしき記述を見つけたのです。

「中庸」が生まれるまでの人間ドラマ

●では気になるその記述ですが、それを紹介する前に、少しだけこの「中庸」という書物が生まれた経緯についての説明を挟ませていただきます。なぜなら、そこには孔子とその弟子たちの道縁や師弟愛が感じ取れる感動的な人間ドラマがあり、それも込みでぜひご紹介したいからです。

孔子と顔回

●孔子は今から約 2500 年前(紀元前 551 年)、中国山東省曲阜に生まれました。複雑な家庭環境の中に育ちながら、15 歳の時、聖賢の学の道に志しました。(「我十有五にして学に志す」という有名な下りです。)以来生涯一貫して講学に燃え、諸国を周遊しながら自ら信じる道を民に説きました。73 歳でその生涯を終えるまでの間、弟子の数は 3000 人を数えたと言われています。

●その弟子の中で、顔回(がんかい)という孔子より 30 歳年下の弟子がいました。思いやり深く清廉潔白で聡明な彼は、同じく非常に優秀な弟子であった子貢に「顔回は一を聞いて十を知る男です。私は一を聞けばせいぜい二を知る程度です。」と言わしめ、それに対し孔子も「そうだね。私も顔回には遠く及ばないな。」と同意するほどの人物でした。きっと孔子もこの顔回を、自らの唯一の後継者として目し、期待していたことでしょう。

●ところがその顔回は、孔子が 70 歳の時、師に先立って亡くなってしまいます。愛弟子の死に接した孔子は「ああ天予(てんわれ)を喪(ほろ)ぼせり、天予(てんわれ)を喪(ほろ)ぼせり」と体を震わせて泣き崩れたといいますから、いかに深い悲しみだったかが分かります。

曾子と子思

●そんな失意のどん底にあった孔子が 72 歳の時、天は曾子（そうし）という 26 歳の若き弟子を孔子に遣わせます。曾子はあまり優秀ではないものの性格は極めて素直で、孔子の教えを誰よりも真っ正直に受け入れ、これを実践しようとする人でした。こうして、曾子の存在に限りない希望を抱きながら、孔子は翌年静かにこの世を去ることになります。

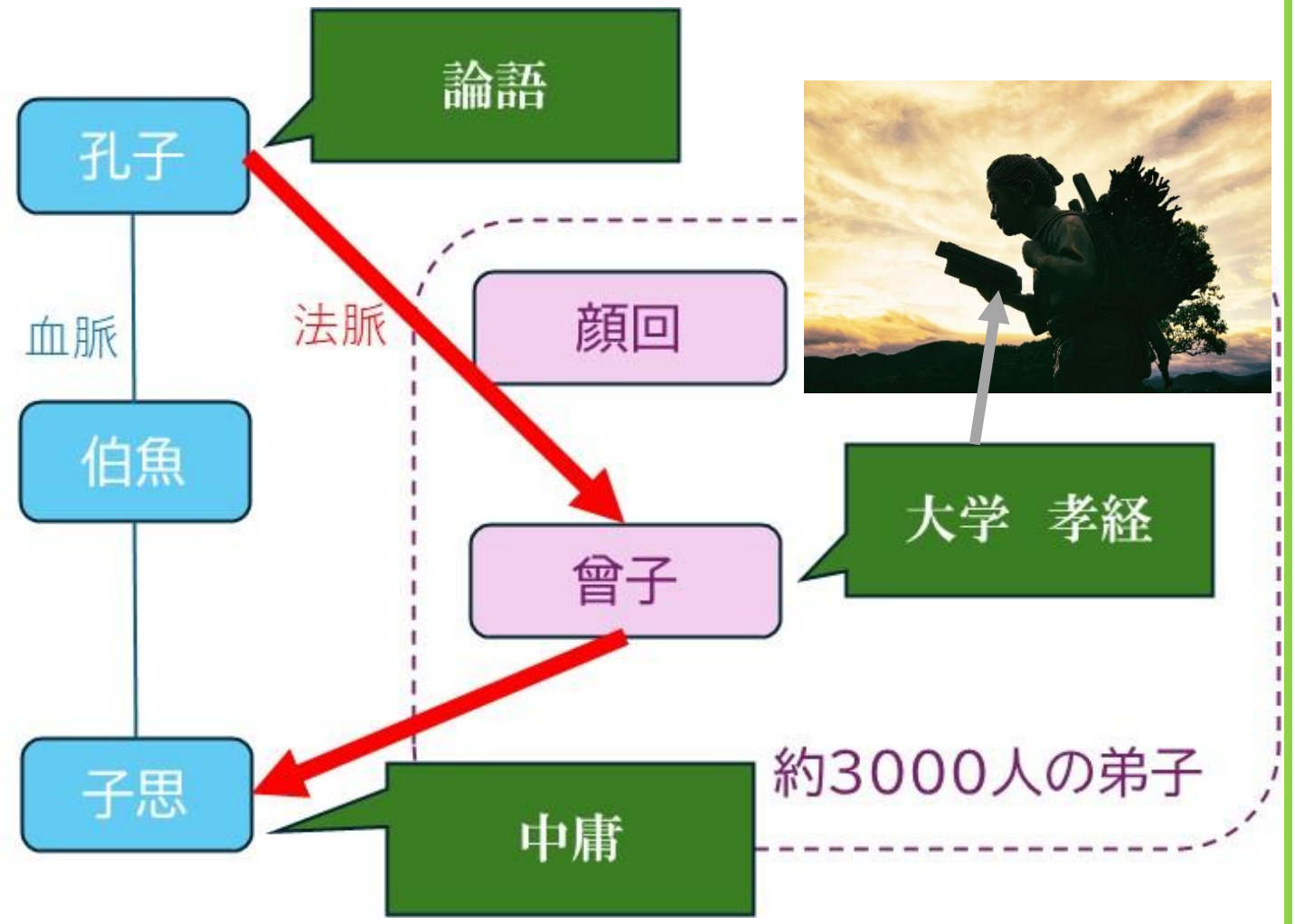
●ところで、孔子には伯魚という長男がいました。しかし、その伯魚も孔子が 69 歳の時に先立っています。この伯魚の子、すなわち孔子の孫にあたる子思（しし）こそが、今回ご説明する「中庸」の作者です。

●いわば隔世遺伝のような形で孔子の優秀な才能を継承した子思は、父及び孔子亡き後（当時 12 歳）は、曾子を人生の師として仰ぎます。あるいは晩年の孔子は曾子に対し、愛孫を託していたのかもしれません。孔子の思いを誰よりも痛感し、志の部分で通底していた曾子がいかに心血を注ぎ子思を教え導いたか、想像に難くありません。

●このように、幼くして晩年の円熟した孔子の謦咳（けいがい）に接し、またその一番弟子である曾子から心魂を打ち込み教導された子思が著した書物、それが「中庸」なのです。

●ちなみに、中庸は論語と同じく「四書」（大学、中庸、論語、孟子）の一つに位置付けられています。四書は、南宋時代の儒学者である朱熹が儒学を学ぶ上での基本書として選定・体系化したものです。前述の曾子が著した書物「大学」も四書の

一つです。かつてどこの小学校にも薪を背負って本を読む二宮金次郎（尊徳）の銅像が置かれていた時代がありましたが、金次郎が熱心に読んでいる書物こそがこの「大学」だと言われています。私は四書の中で「大学」が一番好きなので、もし需要がありましたらいずれかの機会に大学についても、コラムに書かせていただこうと思っています。



未発の中（中）と既発の中（和）【中庸】

●それでは話を戻し「中庸」の記述についてご紹介します。

喜怒哀楽の未だ発せざる、之を中といい、発して皆節に中る、之を和という。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す。

●解説※によれば、人間が抱くに相応しい喜怒哀楽の状態には「未発の中」（中）と「既発の中」（和）の2種類があるといいます。
「未発の中」とは、喜怒哀楽を表には出さず、内部で統制・調和が取れている状態のことを指します。
「既発の中」とは、表に現れた喜怒哀楽が、置かれた状況にビシビシと百発百中当たることを指します。
そして、この中と和を極めていくことで世の中が生成発展していくのだといいます。

●以上の中庸の記述を私なりに子育ての観点からシンプルに超訳しますと、だいたい次のようになります。

喜怒哀楽の感情は、いたずらに放出してはいけない。かといって、こらえたり我慢したりして一切表に出さないこともまた、よくない。日常の中の些細でわがままな喜怒哀楽の感情は、自分の腹の中で治めつつ、ここぞという大事な時には大いに発憤するべきである。このメリハリが上手く付けられることが子育ての要諦である。

●これを今回のお母さまの A さんへの対応に当てはめて考えてみます。

●お母さまは、Aさんの日頃の言動に照らしてAさんの将来をより良いものとすべく怒りの感情を現わしています（既発の中）。また、その後は速やかにお父さまと役割をバトンタッチし、自らはその場を離れることで、過度な喜怒哀楽の放出を回避なさっています（未発の中）。まさしくこの中庸の思想（中和）に合致した対処法だと考えられます。

●とはいえ、こうしたメリハリをつけた喜怒哀楽の絶妙なコントロールは言うは易し、行うは難しで、なかなか難しいです。ではどうすればよいのでしょうか。

発達を理解し、応答する（子ども主体の保育）

●ふかさわミル保育園では、子ども主体の保育のために次の3つの観点を大事にしています。

① 子どもの思いや願いを受け止める
② 発達を理解し、応答する
③ 子どもが主体になれる環境をつくる

●このうち、子どもに対する親や保育者の感情コントロールにとって特に重要なのは②ではないかと私は考えます。例えば生後１年に満たない赤ちゃんに対し、他者への思いやりの言動がないと批難する大人がいないのは、大人になれば誰もがその赤ちゃんという年齢相応の発達を理解しているからです。

●子育てをしていると、いくら可愛いわが子でも、イライラっとさせる言動に出会う場面はたくさんあります。そんな時は怒りの感情の高ぶりをいったんクールダウンさせるべく、その子の発達に思いを寄せてみるのはいかがでしょう。その子の発達に照らしてみれば、致し方ないと思えることも多々あるわけですし、反対にちゃんと伝えるべきこと、伝えるべき感情は『アイメッセージ（例：お父さんは悲しい、お母さんは怒っているよ）』の形で真摯に伝えることが大切なのではないでしょうか。

●つまり、発達を理解することは思いやりであり、孔子や曾

子や子思が大事にしていた「仁」にも繋がるのです。

子育てを十分経験してから嫁ぐ人はいない（大学）

●それでも、子どもとの関わりにおいて大人が言葉のかけ方を間違ってしまうことはあります。しかしそれは仕方のないことです。ちょっと余計な事まで言い過ぎた時は、対等な人間として素直に心から謝ればいいと思います。前述の曾子は「大学」の中で次のように述べています。

赤子を保んずるが如し。心誠にこれを求めば、中らずと雖も遠からず。未だ子を養うを学びて後嫁ぐ者あらざるなり。

（訳）赤ちゃんを育てるようなものだ。真摯に一所懸命対応すれば、たとえ真ん中に的中しなくても大きく的を外れることはない。それは、まだわが子を育てることを十分経験してから嫁ぐ者がいないようなものだ。

園長　橋本　英明

※今回の解説は伊與田覚著「運命を拓く立命の書『中庸』に学ぶ」（致知出版社）から引用しました。伊與田先生の古典の解説は非常に平明で分かりやすく、私が古典にのめり込むきっかけを下さった恩師です。少年時代から論語と大学を暗誦し、平成28年に102歳で逝去されるまでの間、論語と大学の素読は毎日欠かさず行うという徹底ぶりでした。





